佳作

父からもらった「ちから」

新潟県長岡市立北辰中学校
一年　清水紗那

私は、父からいろんなことを学び、「ちから」や「勇気」を与えてもらった。

私は幼い頃、祖父にさそわれ、剣道を始めた。そして、指導者は私の父だった。父は厳しかったが、指導の仕方がとても分かりやすく、できなかったことがだんだんできるようになった。そんな父がよく言っていたのが、「人に言われてもやらないのが、下の下。人に言われてからやるのが、中の中。人に言われなくてもやるのが、上の上。」

このことを言われるまで、人に言われたことしかやらなかった私は、まだまだ努力が必要だと感じ、人に言われる前に行動をするように心がけた。

あれは、私が小学四年生の二月のとある大会でのことだった。父は試合が始まる前に、チーム全員に一人ずつ、アドバイスをした。そして、

「今日は優勝して帰るよ！」

と言った。この言葉を聞くと、なぜか自然とやる気がわいてくる。一回戦を勝つことができた。一回戦が終わった後も父は、

「今日は優勝して帰るよ！」

と言った。やはり、やる気がわいてきた。私達は、二回戦、三回戦と勝ち進んでいった。一回勝つごとに必ず、その言葉をかけてくれた。とうとう、決勝戦。念願だった優勝まであと一歩のところまできた。この大会は県内でも大きな大会だった。しかも、決勝戦のため、とても緊張した。でも、試合が始まり、思い出した。

「今日は優勝して帰るよ！」

その瞬間、

「私は、絶対に、負けない！　勝って次に繋ぐんだ！」

と強く思った。そして、チームのみんなと父と優勝することができた。言葉にできないぐらいうれしかった。

しかし、いつも優勝することはできなかった。とても悔しく、泣いてしまったことがあった。そんな時、父は、

「今、泣いたってしょうがないんだから。今、泣くくらいなら、泣くくらいの稽古をしろ。」

と言っていた。悔しかったが、私はまだ自分に甘いところがあることを実感した。結果を出すには、それと同等の「何か」が必要だと私は考えた。その「何か」は努力なのだと思う。努力をしないかぎり、きっと夢は叶わない。その努力も泣くぐらいの努力をしないと、大きな夢、私の目標である全国大会出場の夢も叶わないのだろう。

父は私にたくさんの勇気を与えてくれた。しかし、あの優勝からおよそ二年。つまり、私が六年生の時、父は他界した。だから、四年生の二月の大会が父に優勝した姿を見せることができた最後の大会だった。もっと優勝した姿を見せたかった。そのことをずっと私は後悔している。今、後悔をしたって、時をもどすことはできないけれど、多分、父なら私を、いや、私達を見守ってくれているだろう。

そして、私はいろんなことを父から学んだ。人に言われなくても、行動することが大切だということ。泣くくらいなら、泣くくらいの稽古をしなければ勝てないこと。また、この作文を書くことにより、気付いたことがある。「優勝する。」というような、強い思いを実際に口に出してみることで夢へと近づけること。もちろん、努力がないことには夢は叶わないと思うが、何度も夢を口に出してみることで叶う夢もあるのだ。もう、

「今日は優勝して帰るよ！」

と言ってくれる人はいない。それでも、チームのみんなと声をかけ合いながら、協力しながら、全国大会を目指す。父は私にいろんなことを教えてくれた。私に「ちから」や「勇気」を与えてくれた。そんな父は、今も見守ってくれている。だから、全国大会に出場して、恩返しをしたい。父からもらった「ちから」でがんばっていこうと思う。